

はじめに

聴覚障害教育は、今日まで実践を通して培ってきた言語指導法を活かし、保有する聴覚を活用しつつ視覚情報を適切に用いる等の配慮の下に、教育を展開してきた。

現在、特別支援学校（聴覚障害）では、教科指導等をどのように学力向上に結びつけていくかが課題視され、実践研究がなされている。

教科指導等をより効果的に進め、学力の向上を図るためには、教材の果たす役割が極めて重要となる。このため、聴覚障害教育研究班では、平成24年度に特別支援学校（聴覚障害）を対象として、教科指導における教材活用の現状を把握するため、教材の保有や活用に関する全国調査を実施した。

この結果、特別支援学校（聴覚障害）においては、自作教材を含め、様々な教材が数多く保有されている実態が明らかになった。また、教材の活用にあたっては、児童生徒の障害の特性、個々の能力に応じ、以下の観点に基づいた教材の加工及び自作がなされている実態も明らかにした。

- ① 情報保障を目的とした加工及び自作
- ② 聴覚障害による言語発達の遅れへの配慮・対応を目的とした加工及び自作
 - ア 語彙・漢字の読みの定着を目的とした教材の加工及び自作
 - イ 教科書本文の内容理解を促すことを目的とした教材の加工及び自作
 - ウ 教科の目標を達成することを目的とした教材の加工及び自作
 - エ 教科に関連する言語習得と言語概念の形成を目的とした教材の加工及び自作

一方、担当者の経験年数に関する調査結果から、教科の目標を達成するための効果的な指導として、上記教材のどれを、どのように活用するかといった教材活用に係る工夫や配慮事項を校内外で継承、共有するのが困難な状況であることも明らかになった。

このような聴覚障害児童生徒への教科指導に係る専門性の継承は、特別支援学校（聴覚障害）の研究会や校長会でも喫緊の課題として取り上げられている。特に、②の聴覚障害による言語発達の遅れへの配慮・対応を目的とした教材は、同一の教材でも指導者により活用の意図や方法が異なることが多い。このため、実際の授業を通して教材の在り方や活用方法を検討し、いくつかの事例として示すことが、専門性の継承、共有につながるものと考え、本研究に着手した。

（研究代表者 教育研修・事業部 主任研究員 庄司美千代）

本書の構成

本研究では、第1章で研究の目的と方法を示し、第2章で、聴覚障害教育における教科指導と教材活用に関する先行研究を概観する。次に、第3章では、平成24年度に実施した教材活用に関する国語科の調査結果の概要を述べる。そして、第4章では、研究協力機関で実施した授業研究と研究協議について述べ、第5章では、総合考察を行った。

また、本研究の一環として、平成25年8月に国語科教材活用に関する研究協議会を開催し、研究協力者の谷本忠明氏（広島大学大学院）に「聴覚障害教育における国語科授業の在り方」と題した講演をしていただいた。当日の講演内容を学校関係者に広く知っていただくため、講演記録として掲載した。